

植物の保護に関連して感ずること

石 沢 進

水草の移植による公園造り

自然を破壊してその後に自然を回復するために、植物を移植して緑にしようという試みがなされている。確かに裸地よりは、道路の緑化などのように外来種の種子散布をするのも何もしないよりはよいと思う。外来種が一時的に茂っても、多くの場合、周辺から在来の種子が芽生え、繁茂するようになれば自然と消滅してしまうように思われるからである。

しかし、最近、自然を早く回復するために、県外などから色々な野生種を持ち込み、自然の中に植込むことが試みられたりしている。移植した当座は位置が記録されたりしてよいかも知れないが、将来その植物の天然分布に間違いを招くことになるのではないかと心配である。移植地に生育していない植物を移植するのであれば、後の人達もすぐ気が付くであろう。移植地に生育している同じような植物が移植された場合は、もともとその地に生育していたのか、他所から移入されたのか区別が困難になる。

都市公園のように一定の範囲に移植するのはしかたがないが、自然を回復する目的で、いたるところに移植するようになると、天然の分布に混乱を来すことになる。

極く最近では、水草の移植も考え始めている。わざわざ水草を育て、移植しなくとも、水辺が造られれば周辺からの水草が繁茂すると思う。できるだけ綺麗な花の咲く水草を繁茂させたいとの意味もあるかもしれないが、移植は感心しない。

かつて淡水魚を各地に放流したことにより、天然の分布が乱されたとも聞いたことがあるが、植物でも全国各地に栽培した水草をばらまかれたのでは、天然分布の混乱を引起

すことになる。水草は川の流れて種子が広範に散らばるおそれがある。植物、中でも水草の自然公園内への移植・導入には細心の注意を払って頂きたいものである。

海岸の植生と帰化植物の繁茂

日本の古来から海岸植生は、残されているところが少なくなってきている現在、やむをえないことかもしれないが、帰化植物の繁茂した海岸の植物景観を”美しい”、”見事である”と表現されると悲しい思いになる。確かにブタナというような植物が、海岸、道路沿い、傾斜地など一面に広がって咲き誇っている様は見事に感ずることもある。しかし、それが日本古来の植物ではなく、外国から移入した侵入者であり、むしろ自然を破壊した結果、繁茂している存在であるということになると美しい、見事であると簡単に賞賛できない心境である。

海岸の植物は帰化植物のアメリカネナシカズラの繁茂によって、これまで蔓延していたハマエンドウ、ハマヒルガオなど美しい花の海浜植物が姿を消して、裸地になってきつつあるようである。日の当たる空き地があると外来の植物がいち早く繁茂して、一見その繁茂の方が、自然に見えるのかもしれない。帰化植物が広域に繁茂しているのは、日本における古来の自然の植物の姿ではないので、そのような植物が繁茂しない方がよいと思う。

自然林と二次林の区別

山は緑であれば、自然が豊富という印象を持っている方が多いように思われ、気がかりである。自然林とは、古来から人の手が入らない状態で保たれている林を意味しているし、

二次林とは、一度人が破壊してその後成立した林を意味している。どちらも大きな林になれば相違はないではないか、と主張される方もいる。

自然林は一度破壊すれば、元の姿に戻すことはほとんど不可能に近いが、例え戻るとしても相当の時間がかかるはずである。鬱蒼と茂っていた森林が伐採されるとそこに生育していた生物相—動植物—を大きく変る。中には絶滅に及ぶ植物も存在する。もしそのような植物があったとすると、その後成立した森林の中には絶滅した種類が再生することが不可能か、近隣から侵入して来るには長い時間が必要になる。

リゾート開発で裸地にした場所に緑を戻せばよいのではないかと簡単に主張される方もいるようであるが、緑に戻しても以前の生物相に返らないことを十分理解しておいてほしいと思っている。

道路沿いの除草

以前にも除草のために、除草剤を使用しない方がいいのではないかと記述したが、各地を訪れて見て、道路沿いや鉄道沿線沿いの除草剤の散布には気掛りである。薬剤の散布は効率のよい方法であるが、長い間に汚染されて目に見えない状態で人間の生活に影響を与えることが懸念される。

除草剤にはいろいろな種類があるでしょうが、全ての草を全滅させるような種類の薬剤を高濃度で使用した場合、草は枯れるが後遺症が残る可能性が高い。強力な除草剤の散布の繰返しと思われるが、車道の斜面が裸地になり、僅かに薬剤から被害をまぬがれた草がかるうじて生きている姿は不自然に思えてならない。長く裸地にしておくと、土をしっかりと

とおきえておく草の根がなくなるので、土は崩れて車道の縁に落ちているのも見かける。やがては車道の崩壊につながるか、その一因になるのではないかと思われる。

地下に浸透した除草剤は周辺部に生育している植物に影響を与え、直接的に、また間接的に人間に影響が及ぶのではなかろうか。

緑の豊かさを売物にしている観光地への道路が除草剤によって裸地化させているのは、心淋しいことである。売物にしている緑の中心地は勿論、そこへの導入部の道路にも配慮がほしいものである。

登山道の草刈と植物採集

登山道は登山客の安全を目的に整備されなければならないことは当然であるが、しばしば矛盾を感じることもある。

登山道沿いにも植物が生えており、それが繁茂すれば道を覆い歩みにくくなって、事故の原因にもなる。それを防ぐために草刈を行う。草刈の程度は条件や位置によっても違うであろうが、無残に刈りとられた現場に遭遇することがある。特に多くの登山客を迎える直前、7月中旬・下旬に登山をすると、草刈の範囲は人が通れる最低の幅でよいように思うが、登山道の両側をかなり広く刈っているのに出会うことが多い。草が元気よく繁茂する低地の登山道ならそれほど気にならないのであるが、亜高山帯以上の登山道を必要以上に広く草刈してしまうのは、惜しいことである。

特別保護地域の植物調査を申請すると登山道より離れた地点で採集するように条件が付けられることもある。一方ではかなり無神経に登山道沿いの草刈を行っている。植物をよく知るためには植物を採取して詳しく形態をみるのが大切である。どうせ刈り取られるならば登山道沿いに植物の地上部を植物専攻の学生に採集させてもよいと思う。特に初心者にはそのような過程を経る方が能

率よく植物を知ることにつながる。つまり、登山道沿いに草を刈り取る前に、植物を専門とする分野の人達に採集を許可し、植物をよく知る機会を与えてもよいように思う。亜高山帯以上の植物採集には随分厄介な許可申請書を提出しなければならないのに、道の草刈では高山植物がかなり無残に刈り取られている現場を見るにつけ、矛盾を感じている。

河川沿いの樹木の保護

河川沿いの樹木は洪水時の障害になるとの観点から、全て切倒してしまうのが、これまでの河川管理の常識になっているようである。しかし、河川の構造や幅の広い河床では樹木が生育していても必ずしも洪水



登山道整備のために刈取られた高山帯の指標植物のハイマツ

時の障害にはならないだろうし、樹木や樹林を残しておくことで部分的な被害を防ぐことも可能であろう。建設省も河川沿い樹木の意義を検討しはじめているようであり、全て切払うことがなくなるようで喜ばしい限りである。

かつて河川沿いに生育し、分布上で貴重な樹木を何とか残すように要望したことがあるが、その当時は河川管理の常識が優先して、その要望は無視されてしまったが、これからはそのような要望も考慮する余地ができてきた。河川沿いには大きな樹木がなく、河の流れだけが延々と続く姿でなく、所々に樹林があり、大

きな樹が高々と聳える景観が見られる時代が来ることを期待したい。人間が護岸だけに気配りしたのでは、自然の河川と言えない。河川もより自然の景観に戻すのが理想であろう。

放牧と植生

新潟では大規模な放牧が行われていないので、家畜によって植物が絶滅することは少ないようである。中国雲南省に旅する機会があり、高山地を訪れたが、その旅で最も印象的なのはどんな山奥に入っても家畜が放牧されて、自然特に植物相が乱されていることである。放牧による土地利用は想像を絶するものがあり、人里離れた内陸の高山まで草が生育

する範囲をすべて利用しているようである。家畜に食われる植物は、その生存が脅かされて、少し伸びると食われ、また伸びると食われてしまう。強度の放牧により、全山裸地化してしまったのではないかと思われる山々が連続している。その景観を見て、人間の土地利用の局限をよく知る必要がある、と強く感じて帰ってきた。

新潟では、家畜の放牧による植物への影響は少ないように思うが、大規模の草地造成がなされ、土地利用が局限に達しないような政策を願いたいものである。